

ワクチン治療確立へ

県立がんセンター 治験開始

県立がんセンター（横浜市中区）は10日、肺癌がんが進行して有効な治療法がない患者に対し、がんワクチンの投与による新たな治療法の確立に乗り出す考え。4月に新設した「がんワクチンセンター」で近く、射線治療、化学療法に次ぐ、第4のがん治療として国内、外から注目を集めている分野。4月に新設した「がんワクチンセンター」で近く、射線治療、化学療法に次ぐ、第4のがん治療として国内、外から注目を集めている分野。

「関連記事5面に
がんワクチンは、人間が本来持っている免疫の働きを活性化し、がん細胞を排除する治療法。近年、がん細胞の表面に、がんの目印となるような分子（ペプチド）が見つかり、臨床研究が進められている。
今回、治験で使用するのは、がん細胞表面の分子を分析して作られた「がんペプチドワクチン」（サバイピン2B）。注射による投与で、がん細胞を攻撃するリンパ球の一種「キラーT細胞」を活性化させる効果があるという。
県立がんセンターの大川伸一院長は「がんの進行を抑える効果がすでに確認されている。さらに検証を進め、将来の薬事承認を目指したい」と話している。
治験では、①サバイピン2Bを皮下注射するグループ②免疫力を高める効果があると見込まれるインターフェロンと併用するグループ③どちらも使用しないグループに分けて効果を比較する。東京大学医学研究所付属病院、札幌医科大学付属病院と共同で実施し、患者71人を対象にする。また、食道がんや膵臓がんに関する種類のがんワクチン臨床試験も行う。
同センターは、治験に協力する患者を募集している。問い合わせ、申し込み

県立がんセンター

希望の治療法 神奈川から

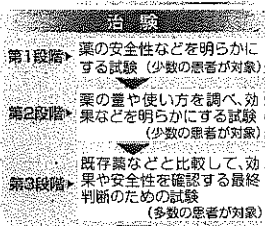
世界先駆け 実用化を目指す

県立がんセンター（横浜市旭区）が今月から治験を始める「がんワクチン療法」は、がん細胞を体内の異物と認めて排除しようとする免疫力を活性化させる。次世代の治療法だ。世界に先駆けて標準的な治療法として確立されれば、切除不能な進行がんの患者に新たな希望を与えられる可能性もある。さまざまな種類のがんへの応用や新療法の開発も目指す「県立の研究開発拠点」が、医療革新に向けた新分野で存在感を高めている。（佐野 克之）

「がんワクチン療法は、期待されているが標準治療として確立されていないのが現状。科学的根拠に基づいて、この療法を開発して、新たな一歩を踏み出す意義を強調したい。」

県立がんセンターで10日に開かれた会見で赤池信雄院長はこう述べ、同センターが新たな一歩を踏み出す意義を強調した。

治験から薬事承認までの流れ



がんワクチン療法が脚光を浴びるようになったのは、米国で前立腺がんを対象としたワクチンが承認された2010年。現在、国



がんワクチンの効果について説明する県立がんセンター・がんワクチンセンター長の大川伸一 副院長

実施する。
次の第3段階が最終段階で、数多くの患者を対象とし既存の薬と比較して効果や安全性を確認。その後、医薬品として国の承認や保険適用を目指すとしている。

「サバイピン2B」の第1段階の治験は、安全性を確認する目的で札幌医科大学の研究グループが12年8月から13年5月にかけて実施。単独で投与された患者のうち約53%でがん進行が抑えられ、重い副作用は認められなかったという。今回の治験は第2段階。薬の使用量や効果的な使い方を調べる目的で、医師が主導して16年12月まで

同センターは昨年11月、建て替えによる新病院に移転。15年には放射線科の一種でがん細胞を狙い撃ちにする重粒子線治療施設が稼働する予定で、がん治療や研究機能を拡充させている。
今年4月に移転した「がんワクチンセンター」では、がんワクチンが適応できるがん種の増加や発症・再発予防への活用も目指している。

は、県立がんセンター ☎045(5220)2227。
(佐野 克之)

がんワクチン 治験募集

県立がんセンター 膵臓がん対象に

神奈川県立がんセンター（横浜）は10日、がんの治験を始めると発表した。既に東大医科研と札幌医大で治験が始まっている。対象となる患者は「第4のがん治療」と呼ばれる。ワクチンで患者の免疫力を高めること

が、がん細胞を生むがん幹細胞への効果も期待されている。副作用も少ないとされ、同センターなどで2016年12月まで治験を続けて効果を確かめる。

すでに手術や抗がん剤治療が効かなくなった患者が対象となる。外来でワクチンを投与し、治験についての患者負担はない。膵臓がんは外科手術などが難しく、今回の治験で効果的なワクチン開発が期待されている。

膵臓がんに新ワクチン

県立がんセンターが治験

県立がんセンター（横浜市旭区）は10日、進行性の膵臓がん患者を対象に新たなワクチンを投与する治験を開始すると発表した。ワクチンによるがん免疫療法は、「次世代型がん治療法」とされており、有効性が確認できれば、実用化に向けて大きな弾みがつくことになりそうだ。

治験で投与されるのは「サブイピン2B」と呼ばれるペプチド（タンパク質の破片）ワクチンで、患者71人を対象とする。がん細胞にペプチドを投与し、それを目印に免疫細胞が攻撃する仕組みで、副作用がほとんどないのが特徴。すでに

に消化器系進行がん患者に対する臨床試験で安全性が確認されている。膵臓がんはがんの中でも最も治療が難しいとされている。治験では、ワクチンを投与するグループ▽がん治療薬などでも使用される「インターフェロンβ」とワクチンを併用するグループ▽偽薬を投与するグループに分けて、有効性と安全性を比較する。期間は今年11日から平成28年12月まで。

がんセンターは今年4月にがんワクチンセンターを開設したが、今回の治験開始で本格開業となる。

ワクチン 治験開始

県立がんセンター ペプチド療法

県立がんセンター（横浜市旭区）内の「がんワクチンセンター」は4月にワクチンセンターを設置した。治験は札幌医科大などの研究チームが進め、膵臓がん治療の初期段階で投与されること

の多い抗がん剤「ゲムシタピン」などによる効果が良好でなかった患者計71人を対象にする。患者は▽ペプチドワクチンを投与する▽ペプチドワクチンに加えてインターフェロンを投与する▽偽薬（偽薬）投与の3群に分けられ、がんが悪化しない期間を比べる。3群の振り分けは無作為で患者や主治医には知らされない。プラセボで症状が悪化した患者には本物の薬を処方する。

県内外の患者に参加を呼び掛けるが、白血球の型や採血結果などに条件がある。問い合わせはがんワクチンセンター（045・520・2227）へ。

【高木香奈】

膵臓がん ワクチン 臨床試験を新機関で

がんセンター

県立がんセンター（横浜市旭区）は11日、臨床研究機関「がんワクチンセンター」を開設し、膵臓がん患者に対するワクチン投与の臨床試験を始めると発表した。がんワクチンは患者の免疫力を高め、転移や増殖の原因となる「がん幹細胞」も攻撃できると期待される治療。同機関は臨床試験の参加者を募集している。

県立がんセンターによると、札幌医科大が2012、13年、膵臓がんを含む消化器がんの患者に対する臨床試験をした。ワクチンのみを投与した患者の約半数でがん拡大が抑えられ、重篤な副作用もなかったという。

今回の試験は第2段階で、同大や東大医学研究所も参加する。ワクチンのみと免疫活性化剤を組み合わせたワクチン、ワクチンを含まない偽薬の3事例について、がんの悪化する時期や期間を約7か月かけて調べる。試験は16年12月まで実施する。

参加者は、膵臓がんと診断された20〜85歳が対象で、白血球の型や健康状態などの基準を設けている。問い合わせは同機関（045・520・2227）。